

私はエチュードをこう考える ハノン、スケール、ツェルニー、 ショパン・エチュード全ては芸術！



下田幸二先生

当協会国際委員、指導法研究委員、相愛大学特任助教授、フェリス学院大学講師、桐朋学園大学講師（担当高校音楽科）。元ポーランド国立 J. エルスター高等音楽学校講師。

「作品中の1小節」のテクニックを「エチュードの32小節」で磨く

—— 下田先生は、レッスンの中で主にハノン、ツェルニーをエチュードとして取り入れていらっしゃいますが、エチュードをどのように捉え、生徒さんに取り組ませているのでしょうか。

まず、テクニックと音楽は絶対に切り離せないと思います。例えば、速いパッセージを弾いたときに、美しいと感じるためには、「美しい音」プラス「指の動き」が必要です。当然、脱力、均等にタッチするバランスの取れた指等が必要になってきます。練習の中で意図しているのは、一音一音の脱力したタッチ、そこから始まった連続したレガートが基礎になるという事です。レガートの基本は「つなげる」のではなく「重ねる」。本当を言えば教材はハノンでも何でもいいんです。私はフィギュレーションも美しい音楽、スケールも芸術的と思っているのですが、如何に美しい音楽として弾けるかということ。素晴らしい作品を弾くためには、基礎をしっかりとしてあげることが必要だと感じています。

エチュードというのは、作品の中の要素を絞って練習するということだと思のです。スケール、アルペッジョ、跳躍などの連続した練習になるわけです

が、例えばモーツァルトのソナタの中で跳躍のテクニックが1小節あったとしたら、エチュードでは32小節出てくる。その32小節を継続して正確に弾くというのは、とても難しいことですよ。だから非常によい訓練になるのです。そこで身についたものは、1小節ならとても簡単であろう、という考え方でしよう。まず作品ありき。作品の中にあるものを、エチュードで取り出して練習するという事ではないでしょうか。

—— どのくらいの重要性を持ってレッスンされているのでしょうか？

私はピアノを習って3～4年以降の生徒を見ることが多いのですが、私のところに習いに来る生徒には、皆ハノンを勉強させます。レッスンを始めたばかりの生徒などは、1時間くらいかけて一つの音の出し方、フレーズの入り方の練習から始まり、次にハノンの第1番から31番のフィギュレーションの課題を使って、良く響く音、レガートを中心に身につけて行きます。「芸術的に弾くハノン」ということを求めているのです。

最初の3ヶ月から半年くらいは時間がかかりますね。レッスンでやったことを自分でできるようになるまでに、そのくらいかかってしまうんです。

ハノンにしてもスケールにしても、またツェルニーにしてもショパン・エチュードにしても、ある程度先生が弾いて見せなければならぬと思います。導入は弾いて真似させることも大切です。例えばモーツァルト、ベートーヴェンのソナタとツェルニーの練習曲の音型の比較などの具体的な例を弾い



て示してあげると、生徒も今日散々やったことが、この曲に結びついていると
いうことを感じる。それは3日経てば忘れるかもしれないのですが、また次の週に同じことをやれば、4日間覚えている。その次は5日間覚えている。その積み重ねというわけですね。いろいろな作曲家の作品のレッスンの中で、さっきのツェルニーのこういうスタッカートの脱力を使わなきゃとか、さっきのスケールのタッチを使わなきゃとか、事あるごとに言ってあげるようにしています。

—— 経験の積み重ねで身についてくる訳ですね。

そうですね。繰り返し指摘することで、ハノンもちゃんとやらなければと思う。もしかしたら綺麗なかもしれないと思ってくれる。それが習慣化してきて、逆に指ならしでハノンをやらないと練習が始められないくらいの感覚になれば、しめたものです。

なぜハノンを使って時間をかけてやるかというと、一番の基礎の基礎だからです。ハノンに限らず、一音一音美しい音を作っていくというのが、レッスンの重要な要素です。

脱力ができて、きれいな音が出せるということは、腕の使い方が良いということなので、テクニックも非常に良いものが身につきます。小学校3、4年生に入ったらかなり詳しくやるようにしています。

ピアニスト＝演奏家になれる、なれないかの線引きは、よく響く美しい音と美しいレガートを持っているということが、最低条件と感じています。

手首中心ではなく、腕の重みを鍵盤へ伝える

—— 手首をコントロールすることも、レッスンの中で頻繁に使われていた言葉ですね。

手首から上げて、ここで下げてという指示をする場合があると思うのですが、子供の頃に上げ下げばかりを強調してやってしまうと、手首中心に弾いてしまう事があると思います。そうすると、ピアノは非常に大きな楽器ですから、重さがうまく鍵盤に伝わらず、音が薄っぺらくなってしまいます。腕の重みを自然にしっかりと鍵盤に伝える、ということが欠如してしまうのです。(ビデオ参照)

手首のコントロールというのは、ロシア～東欧圏の伝統的な重量奏法においては非常に注意しないといけない部分です。本当に先生が注意深く教えないと、全然腕が使えていないのに、手首だけがぐん、ぐんと弾いてしまう例が多く見られます。

昨年の浜松国際ピアノコンクールでは、ブレハッチとコプリンが2位を分け合いましたが、彼らのやってきた基礎というのは、体の自然な重み、もっと狭い範囲で言えば、腕の重さをいかに鍵盤に効率よく伝えるかということ。また、それをゆっくりな動きのところではカンタービレに結びつけ、速い動きのところでは粒立ちの良い音で弾くことに結び付けていく。どんなに小さなPPの пассаージュでもホールの後ろまで聞こえる。その部分が身についているか、ついていないかで、非常に差がついているのだと思います。

ハノン・スケールのレッスン計画

—— では、エチュードの具体的な練習方法をお伺いしたいと思います。

ハノンの使い方は、1番から31番のフィギュレーションの練習を、1週間に1個ずつ必ずやります。最後までいったら1番に戻って繰り返し。レッスンを重ねて慣れてきた生徒の場合、フィギュレーションの実践は最初の3、4ポジションくらいみればあとは一緒ですから、まずいところがあれば指摘して、というふうにします。すると、最初1時間くらいかかっていたのが、抜粋して15分から20分くらいで済む



ようになってきます。

十分な脱力ができ、レガートで豊かな響きを持って弾くことができるようになった生徒に限っては、移調してCis-durもやっています。

スケールは、ハノンの譜割り(ドレミファ、ソラシド、レミファソという16分音符4つずつの譜割り)ではなく、オクターヴの譜割り(ドレミファソラシ、ドレミファソラシという7連符)でやっています。その方が、ポジションで覚えることができるし、アクセントが変なところにつかないという効果があるのです。また楽譜どおりではなく、最初並進行から始まって、反進行のスケールも入れ、必ず長調、短調をセットでやります。他に、三和音、属7、減7のアルペッジオも入れていきます。(※ビデオ参照)

レッスンの進め方は、ゆっくりのレガート、リズム練習(付点と逆付点)、スタッカート、テンポを上げたレガートで。最初できないときは、ゆっくりから1オクターヴの間でアツチェレランドしていくようにしています。そして同じ感覚で速いテンポで2オクターヴを弾けるようにしていきます。

—— エチュードは、「数こなしの曲」になってしまいがちな要素も合わせ持っていると思うのですが。

やはり、まずはツェルニーにしる、クレメンティにしる、ショパンにしる、どんなエチュードでも美しい曲だというのを自覚させることでしょうか。私はツェルニーには、素晴らしい曲が沢山あると思います。

それには例えば、先生が弾いて見せるという手段があると思います。ある程度弾いて見せて、い



かにこの曲が魅力的であるか、パッセージが美しいレガートの良い音で

弾かれるとどんなに素晴らしいのか、ということを感じてもらいます。時には、悪い弾き方の見本もあります。あなたはこんなかんじと……。動機付けとしては手っ取り早いですよね。

こんな風に弾くのかというのを聴くことにより、生徒がそれに近づけた時に達成感があるわけです。単に乾いた音でバラバラと弾いてしまっていたらそこで終わっちゃう。スピードは大切だけれども、きれいなタッチが伴っていなければ、乾いたモーツァルトのソナタを弾く子供になるでしょう(笑)。

音に関する美意識

美しい音というのはどんな音なのだろうかという探究心、美しい音を聴いてもらいたいと思う心が育ってくれることを望んでいます。

具体的な練習方法としては、例えば作品の中で「ソラシドレミファソ」というスケールがあったら、最初のソラシだけを繰り返し、繰り返し弾いてもらいます。そして、例えば最初のソだけでも美しい音が出たときに、「これが綺麗な音だ!」ということを確認に指摘してわかってもらうのです。

どんな曲でも美しく感動的にということが大切だと思うのですが、バーバリズムとかフォービズムからくる音楽の中には、かなり直感的な音もあります。例えばバルトークの作品など、時にはわざと乱暴な音を出しますが、その作品の中にあっては美しい音として機能しますよね。美意識ということです。

時には突き刺すような音が必要だったり、大地を揺るがすような轟音が必要だったり、耳を澄まさなければ聞こえないような音、乾いた音……等。全て芸術に寄与する意味での美しさを求めているわけです。

全ての基本は、芸術性に優れた感覚を持って、如何に音を出せるかという事に尽きると言えるのではないのでしょうか。

インタビュー・文：吉田絵美子(当協会正会員)



私はエチュードをこう考える 技術は「耳」に宿る



クラウディオ・ソアレス先生
当協会正会員、同志社女子大、大阪教育大講師

—— チェルニーやハノンは、レッスンにどのくらいの配分で組み入れてますか？

チェルニー 30・40 番は、古典作品の技術の基礎なので、全曲やらせています。まずは1本1本の指がきちんと打鍵できる状態を作るのが目的です。腕を一切使わず、指の動きを研究する、つまり指の技術を作ることです。

いつも同じグループで、3～4曲ずつ同時進行しています。同じような技術は同時に磨くのがよいと思います。最初の5曲をきっちりできれば、次の5曲はそれほど大変ではないです。あと、初見が早くできる、暗記力をつけること、固まりで一緒にやる、ということが大切です。

—— レッスンの中で「今、自分の響きをちゃんと聴いてた？」という問いかけが、随所に見られました。

エチュードは技術を磨くためだけのものではありません。



ません。技術とは「耳」にあるもので、指ではないのです。受身の状態で、指だけが打鍵している状態は避けなければなりません。楽譜を読んで弾きたい音のイメージを持つ、そうした表現意欲や音に対する意識を持つことが一番重要です。全ては、脳と指のつながりなんです。技巧的にバリバリ弾けるよりも、「気持ちをこめて表現しよう」という心さえ持っていれば、あとは指導の仕方次第ですね。上野さんも河合さんも、すでにそうした意識を持っているので、今は技巧的なことばかりアドバイスしても、決してそれだけにはならないのです。

—— レッスン室で覚えた「音」を、どのように記憶して練習すればよいでしょうか。各ご家庭によって環境が異なると思いますが。

「音と手の感触が組み合わさった記憶」が技術なのです。どのような響きと感触を記憶させるかは、とても重要です。

実はこのレッスン室は、舞台と同じ状況になっています。よく見ると正方形ではないんです。ちょっとずつ壁を斜めにして、台形にしています。これは音の吸収、反射の環境が舞台と同じ設定です。

生徒がレッスンの時に指先に圧力をかけ過ぎてしまう原因は、自宅の練習室で弾くと、音が吸収されて響かない環境であることが多いです。大体どのように弾いてくるかで、その生徒の家庭のピアノ環境が分かります。ですからそのような生徒の場合、調律師の方に各ご家庭部屋の状況や楽器の状態もチェックしてもらうようにしています。そういう環境設定も大事ですね。レッスン室でいくら一生懸命弾いても、家に帰って違う状況だと、同じ結果



が出せませんので。

——ところで生徒の河合唯さんは今回、ショパンのエチュードを4曲練習されていますね。

今年のピティナ・ピアノコンペティションが終わってから取り組んだので、1ヶ月半ほど前です。今日が4回目のレッスンですが、まだ根本的なアドバイスしかしてません。最初の3回はどれだけ速く弾けるかやってみて、今日はほぼインテンポで弾けるようになりました。このようにまずインテンポで弾かせるのには、意味があります。ゆっくりなテンポで可能な弾き方は、速い曲では不可能なんです。まず速いスピードで手の動かし方や体の動きを覚え、それからゆっくり練習するようにしています。一度速い動きを体験すれば、次に何をやったらよいか、目的がはっきりしますね。

日本ではショパン・エチュードやベートーヴェンのソナタをよく弾かせる傾向がありますが、これらはやれば結果が出るわけではありません。河合さんには一気に4曲やらせていますが、実力がなければ、大学生でもそのような作品を弾かせないこともあります。しかし一度やるとなれば、高級な仕上がりを要求します。

——河合さんの場合、基礎的なテクニックはどのようにトレーニングされたのでしょうか。

彼女は3年前から指導していますが、以前エレクトーンを習っていたので、打鍵した後で圧力をかける習慣がありました。そこで、まずチェルニー、音階、ハノン、ピシュナ等、単純な練習曲を使って、指の動きを強化する練習を集中してやりました。1本1本の指の角度、脱力、力の入れ方、基礎的なことをかなり時間をかけて行いましたね。だいぶイジメました(笑)。今でも少し圧力をかける癖が残ってます。指先の関節を固定させることがなかなか難しいんですね。

多くの子供が、手の平を先に固定してしまっていますが、そうすると指が独立しません。後からそれを直していくのは大変です。まず指の独立が先で、それから手の平を固めていくことを意識してほしいです。



——小中学生に難曲を弾く人が増えていますが。

普通は手のサイズに合わせた曲を選ぶべきなのですが、届かないのにオクターブが必要な曲や、追いつけないほどスピードの速い曲など、やや背伸びした曲を選んでしまいがちです。これは大きな問題ですね。私の生徒でとても進度の早い子がいますが、5年生なのにオクターブが届かないのです。手を広げればぎりぎり届きますが、どうしても上腕に力が入ってしまいます。本人は難しい曲を弾きたいのに、手が許してくれない。でも、そこで我慢することがポイントです。いずれ大きくなります。

——どのように生徒さんの欲望を抑えたのですか？

ソナチネ等の古典、バロックにはそれほど大きな手が必要ではない作品が沢山あります。「このような作品も弾かないといけないな」という話をよく生徒とします。私は生徒とよく話しますが、本人がどういう目的でどこに向かっているのかが理解できてない限り、暗い部屋で道を探るのと同じ状態になってしまいます。それは防ぎたいですね。

——まず生徒さんが弾いてそれに対して、「今のは自分でどこが良かった?」「何か言いたいことはある?」というような質問が先生から多く発せられ、徒さんもはっきりと応答していたのが印象的です。目的意識がはっきりしているということですね。



私はエチュードをこう考える 音のイメージと結びつく 体の動きを



杉本安子先生

当協会執行役員、運営委員、演奏研究委員長、指導法研究委員、ステップ満のロケーション代表、コンクール事業担当者連絡会、洗足学園音楽大学教授。

「はっきりと音を弾きなさい、 鍵盤の底まで」の受け取り方

——最近はとてもしっかりした打鍵の方が多いですね。皆さんはどのような教育を受けているのでしょうか。

「鍵盤の底までしっかり、はっきりと音を弾きなさい」という指導を受けている方は多いと思います。全て均一に粒がそろった音が出るのは素晴らしいのですが、カタカタ・・・と単に動く指になってしまい、音楽的な指や感性が育たないのではないかと、少し疑問に思うことがあります。「音楽はうねり、イントネーション」とは三善晃先生の言葉ですが、体の重みをうまく利用してうねりを表現したり、和声感のある音を作るには、単に奥底までしっかり打鍵するだけでは難しいかもしれません。

まず「音のイメージ」を持ち、その音を出すにはどうしたらよいかを考える必要がありますね。

では、様々なリズムや多彩な音色、強弱に対応できるようにするには、どうしたらよいのでしょうか。私の場合は、「食い違いの運動」というエクササイズをやっています。(※ビデオ参照) 指は指で鍛えておく必要がありますが、手首が柔らかくなるという効果があります。小学校低学年で指だけを鍛えたあまり、手首がガチガチというケースが多いようですが、むしろ手首を柔らかく保つようにして、骨



格ができあがってくる高学年くらいで指を強化してあげる方がいいのではないかと、思います。骨格ができてくると、脱力もしやすくなります。

脱力は単に力を抜くことではなく、一瞬に「うんっ」と力を入れるために行うものです。脱力しておいて、瞬間に力を入れるんですね。これはテニスなどのスポーツも共通していることです(ボールを打ち返す時の打点ポイントに最大の力が加わるように、脱力した状態で腕の振り子運動を利用して振りぬく)。弾くという行為は、運動神経が作用します。感性や成熟度などはまた別の話ですが、「ピアノを弾く」ということに関しては運動神経の良さは重要ですので、生徒には何か運動をするよう言っています。

私自身は特にスポーツクラブに通ったりしていませんが、学生時代は水泳で2～3000メートルくらい泳いでいました。

エチュードの基本はみっちり

——1時間レッスンの中で、エチュードはどのくらいの配分なのでしょう。

まず試験やコンクールのない時期にどの生徒に



もやらせるのが、ハノンやツェルニー、そしてバッハです。ハノン、ツェルニーでは指や手首、腕の使い方、スタッカートや弾き方、リズムなど、多くの要素をやらせます。生徒にピアノノートというのを書かせて、ポイントを自覚させるようにします。このように、30分～40分くらいエチュードに時間をかけて、その後バッハを20分ほどやって終わる、というのが通常のパターンです。エチュードの基本が体に入ってきてできるようになったら、もう少し短時間で終えるようになります。試験前は曲だけになりますが、通常は基礎を重視しています。

チェルニー 30 番に戻った学生時代

——先生ご自身はどのように基礎トレーニングをなさったのでしょうか。

実は私自身、一度来た道に戻っています。小学校の頃は何となく弾けるということでチェルニー50番位までやっていましたが、中学校に入ってからもう一度チェルニー30番に戻って、基礎を徹底的にやり直しました。だから、弾けない人の悩みは何となく分かりますね。

今年のアテネオリンピックで男子体操が団体を金メダルを取りましたが、五輪代表コーチは元オリンピック選手ではなく、オリンピック代表選考から漏れた元選手でした。彼は自分が実現したかった「基本に忠実なきれいな体操」を成し遂げるべく、現代表選手に基礎をみっちり叩き込み、そして団体を金メダルに導いたそうです。全ては、基礎に



戻るのですね。

ショパンエチュードに入るときは、やはり決断が必要ですね。まず弾ける状態になるまでは、地道に基礎練習をやらせたいのが本音です。生徒でも、小学校のうちに弾いてみたい、という子がいます。その意欲は素晴らしいと思いますけど、その前にやることあるでしょう、と説得しました。骨格や体の成長の問題もありますので、弾きたいからといってどんどんやらせていると、指を壊したりする危険もあります。まったく弾いては駄目というのではなく、時期に応じてやらせるべきですね。その辺の見極めは、指導者として難しいところですけど。もちろん一度挑戦させておいて、しばらくの間寝かせておき、オクターブが届くようになり、音が出るようになったら、もう一度弾かせてみる、という考え方もありますね。個々の生徒の状態に応じて、「今だったらいいかな」と思う瞬間を見極める、それは先生のさじ加減次第だと思います。

表現したい音を得るために

ピアノは、運動神経、指、教養、才能など、全て整わないと難しいものです。しかしピアノを弾く行為を楽しむことは誰もができます。それには、まずある程度きれいで、かつ自分の表現したい音で弾けるようになる、というのが第一歩です。エチュードでそれを高めておいて、成長したら人生経験や教養がついてくるでしょうから、さらに音楽に深みを与えることができるでしょう。チェルニーを段階的に勉強することで達成感を持ちつつやるといいでしょうね。それも単に指を鍛えるためではなく、なるべくチェルニーを音楽的に弾いてみることを意識しては、いかがでしょうか。かのホロヴィッツは「C durのスケールが一番難しい」といつていたようですが、ある意味真理なのかもしれません。



私はエチュードをこう考える 技術とは、総合学習で 得られるもの



江崎光世先生

当協会運営委員、指導法研究委員、コンクール事業
担当者連絡会委員、課題曲選定委員長、新曲課題
曲選定委員、課題曲選定委員、ステップオプション企
画委員会。

——まずエチュードに関する基本のお考えを教えてください。

エチュードは単に指を正確に早く動かすためのものとしてとらえるのではなく、表現力を育てるために合理的に活用して、基礎力を育てたいというコンセプトでとらえています。

技術とは、指のテクニックだけではありません。ソルフェージュや連弾、楽典の知識等、あらゆる要素が必要です。つまり「総合学習」で得られる方が近道です。ですから、導入の段階から、ソルフェージュなどを積極的に取り入れて、総合的なセンスを磨くことを目指しています。

私達の時代は、大学受験の為のソルフェージュでした。けれど本来は、「演奏に生きる為のソルフェージュ」であるべきですね。私はソルフェージュを、普通のレッスンの中に入れていきます。



例えば右手のメロディに、自分で左手の伴奏を付けさせたり、コードネーム、度数、階名を3セット一緒に覚えさせたり。これを一度体の中に入れてしまうと後が楽なんですね。

ただし「毎日続ける様に導く」、つまり、バスティンメソッド方式で導入することは、とても合理的です。ソルフェージュを単に知識でなくこれをレッスンの中でどう役立てるかで音楽を言葉のように扱い、必ず演奏と結びつけて活用していく事は大切です。従って、曲に取り組んだ時の意識も違ってきます。

スケールの場合は、音階構成音とカデンツをしっかり身に付けてもらいます。低学年の間に全調を習得してしまうとよいでしょう。

こうした要素をこなしていれば、楽曲分析が少しずつ楽になり、練習や演奏が楽しくなるようです。でも実際、こうした基礎というのはとても時間のかかることです。少しずつ定着させていき、大人になった時に「あ、こういう事だったんだ」と分かる日が来れば良いかなと思います。

「メカニク」より、「音楽」から始める

——初心者から上級まで、あらゆる段階のお子さんをご指導されていますが、初級の方にはどのようなエチュードのレッスンをされているのでしょうか。

エチュードとしては、「初歩者のためのレクリレーション」というテキストを使います。この本には、モーツァルト、ベートーヴェンやウェーバー等の作曲家や、オペラ、アリア、民謡などジャンルも様々なものが入っています。いきなりチェルニー30番だ



とメカニック中心になってしまうので、まず音楽を感じさせるところから始めるわけです。音楽というのは、感性とメカニックのバランスが重要です。

チェルニー 30 番に移る前に 100 番もやらせていますが、全体が見渡せる小さな曲の中で基本的なことを学んでもらいます。主題を見つけて曲の構成を理解させたり、曲全体を移調させたり。

指のテクニックを鍛えるのは、骨格がしっかりしてくる小3～4年生くらいからが適当だと思います。右手の粒がそろわない、音が均一にならない、指が動かない、弱い子などにはよくやらせていますが、それ以外は必要に応じて使っています。

チェルニーは構成がシンプルですから、音楽作りの基本である機能と和声を理解させるには適した本だと思います。30 番のあとには「モシュコフスキー 20 の練習曲」より、10 曲くらい抜粋して練習してもいいですね。さらに成長したら、本格的にモシュコフスキーやクレメンティに進ませます。

30 番、40 番の最後の曲だけ、毎週グループで行うソルフェージュの会で、皆の前で弾かせるようにしています。「これでこのテキストを終わりにして良いか？」ということ、他の生徒が審査員になって判断するのです。拍手が多ければ終了、少なければまた翌週挑戦させます。このようにすると達成感が得られますね。

私が指導を始めた初期の頃は、小5くらいでチェルニー 50 番を弾かせていたんです。しかし、それでは意味がないことに気づきました。そこで、次の世代には、大人になった時に役立つように基礎力を徹底的に身につける努力にきりかえています。プロを目指す子ならば早い段階である程度のプログラムが組めた方がいいですが、それ以外の子は定着するまで時間をかける方が応用力が育ち効果的です。

連弾にもエチュード的な効果

—「総合学習」の中に連弾も入っていますね。これはエチュードとどのような関係があるのでしょうか？

レッスンで前後になる生徒を、それぞれ各5分ずつくらい使って連弾を導入する方法です。毎週1回か2回ずつ、少しずつやっただけなんです。もちろんパートも交替させます。パートを交代すると、「プリモだと右手を大きく出さなきゃいけない。セコンドだと左手を出して右手を弱くする」というように、両手のバランスがだんだん上手になります。時々どちらかのパートを抜いてみて音楽がどうなるか、自分がないとどうなるか、というのも試しています。すると、各々の手の役割が明確に分かるようになり、音楽の各パート、声部がいかにか大事かというのを実感出来るようになります。

ソロだけを弾く弊害の一つは、右手だけ強くなってしまふこと。ソロだけの生徒にいきなり連弾をやらせると、右手がどうしても大きく出てしまいます。逆にセコンドにすると、内声が強すぎてしまふんです。でも連弾を経験することで、両手のバランス感覚が身につくようになります。また相手がきちんと息をしているのを見て、自分も息を吸うようになり、テンポが安定してくるという効果もありますね。

—エチュードとは指の強化だけではなく、両手のバランス、タイミング良い呼吸、拍感、スピードなど、あらゆる要素を包括するものなのですね。そしてそれらが連弾を経験することでさらに磨かれ、実力を育てる近道にもなるわけですね。

初級編

質の良い音を出す 下田幸二先生×大友聖奈さん(小4)



まずは「脱力」※左写真参照

1. →2.腕をまっすぐに伸ばし、「指から先→手首から先→肘から先」の順で脱力していきます(この状態では、まだ肘から肩にある程度緊張が残ります)。
3. そのままの状態では指先を鍵盤に近づけます。
4. 指先が鍵盤についたら少しずつ肘を下げ始めます(下がるにしたがって肘から肩の緊張もとれてきます)。
5. よい位置で脱力できたフォームが完成します。
6. そのまま重さが下がれば音が出ます＝打鍵。

その日のその後のレッスンは・・・

1. まずは「一音から」

写真の4～6の動作を繰り返すようにして、1音1音丁寧に「輪郭のはっきりしたよく響く美しい音をイメージして」音を出します。最初は3の指で「ミ」の音がいいでしょう。

2. 少しずつ音を足していく

「ミ」の音を何回も弾いて理想とする音に近づけます。美しい音が出せ始めたら、2の指で「レ」、4で「ファ」、5で「ソ」、1で「ド」と1音1音試みましょう。次に、少しずつ音を増やしていきます。「レミ」、「ミファ」、「ドレミ」、「ドレミファソラシド」…

3. 基本に戻ること忘れずに！

形が崩れたら、また振り出しに戻って一音一音理想とする音を出してみましょう。

4. リズム変奏でより滑らかに

リズム変奏、スタッカート、スラー等、様々な方法で滑らかな音を出すようにトレーニングします。

5. 「ちょうちょ」演奏の白露比較！

全ての音が明瞭に、かつ質の良い音が出るまで粘り強くトレーニングします。ロシアやポーランドではまず最初にこうした練習を行います。習い始めは2週目までずっと「ミ」のみ、3週目でようやく「レ」、4週目で「ファ」が加わる、といった進み具合。その結果「ちょうちょ」でも日本とは違う弾き方になります。こうした最初の教育次第で、後から大変な差がつくことを覚えておいて欲しいです。

6. 一生続ける、基本中の基本

一音一音確実に音を美しく響かせる練習は基本中の基本。これはたとえ明日コンクール本番という状況でも、ピアニストになってからも一生続けなければならぬものです。



ウェブでご覧になれます。
<http://www.piano.or.jp>

チェルニー：初歩のためのレクリエーション 江崎光世先生 × 長田悠希さん (小2)
 チェルニー：100番の練習曲 第66番 緒方南友美さん (小5)



1. はじめに「歌」、そして「メカニック」へ

ただ指のトレーニングのために弾かせるのではなく、最初は音楽が表現できるようなテキストがいい。いきなり30番だとメカニック中心になってしまうので、一番初めに使うチェルニーは、歌を意識させる「初歩のためのレクリエーション」にしている。ベートーヴェンやモーツァルト、ウェーバー等の歌曲や、オペラのアリア、民謡などがやさしく編曲されているので、音楽表現がしやすい。



2. 和音、フレーズ、音の方向性を十分意識して

どういう和音やフレーズなのか、音がどこへ向かっているかを十分意識して弾くこと。また八分の六という拍子をよく感じて。



3. コード進行も確認しながら

【5～6小節】G7-C-A7-Dというコード進行を十分意識して。

4. 自分の音を客観的に聴いてみよう

自分の演奏をMIDIに記録して、最初と最後の演奏を聴き比べてみると、その違いが歴然と分かる。

5. 全体が見渡せる小品で、移調のトレーニングも!

本来「リトルピアニスト」や100番を確実にきちんとやると、中2くらいまでかかってしまうが、その後が楽になる。100番のように短い曲だと、全体が見渡せるので全曲移調など色々なトレーニングができる。また第1主題、第2主題といった簡単な楽曲分析も少しずつやっていく。感覚だけで弾いてしまうと、CDの模倣はできるけど、「どうしてそうなるのか?」と裏づけが理解できない。だから理論も同時に勉強して、反射的に調性の判定ができるようになってほしい。

チェルニー：初歩のためのレクリエーションより80番



チェルニー：100番の練習曲より66番



チェルニー 30 番の第6番 角野美智子先生×小金井まりさん(小3)



1. 全体の構成をつかむ

まず全体のコード進行を確認する【ハ長調I→4度→属七→ト長調属七→1度の第一展開→2度の第一展開→第2展開→属七→一度】

2. 音楽を体とイメージで感じて

【冒頭】「ソード、ファード」の動きを意識して。ブランコにのっている感じで。楽器に例えるとハープのような柔らかいイメージ。



3. 音階はグリッサンドのごとく

【9小節〜】音階はグリッサンドのように弾いてほしい。指先の神経を感じながら、フィンガースタッカートで練習。

4. 和声を意識すると、音色が変わる

【9〜12小節】同じフレーズが2回続くときは音色の違いを出す。左は和音で取り、和声を意識させる。



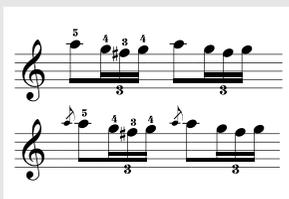
5. 粒を綺麗に揃えたい

【16小節〜・右手】4の音が出にくい時の練習方法。

※左下譜例参照

【16小節〜・左手】左手をなめらかにする練習方法。分散和音とスタッカートを有効利用する。

【21小節】大切なメロディをきちんと出す練習方法。(ソファ、ソファミ、ソファミレ・・・一音、二音、三音と音を増やしていく)



6. 音はどこへ向かっている?

【21小節】頂点に向かう時と戻ってくる時の、音の方向性を感じる。原点の「ソ」の音を5の指で打鍵した後、上に跳ね返ってくる響きを聴いて頑張って押し込まないように。また、左手の和声進行を意識して、音の方向性を考えて弾くこと。右手は下降する際に、大切な音を美しくつなげる。

Allegro leggiero. $\text{♩} = 76$

【冒頭部】

6. *p* ①

【中間部】

ff *res.* ②

21



ウェブでご覧になれます。
<http://www.piano.or.jp>

ミニインタビュー Vol.1

チェルニーでいかに質の高い練習ができるか

角野美智子先生



小金井まりさんは、幼稚園年長の頃から小学校3年生の今まで3年間半レッスンしています。最初は速い曲が好きだったのですが、昨年の発表会でバッハのフランス組曲

3番を弾いてから、しっとりした曲が弾けるようになりまして。徹底的に自分の音を聞くようにさせて、それができるようになりましたね。普段はハノンやビシュナ等を使って、3・4・5の指の独立をさせるように毎日家で練習させるようにしています。

私はエチュードを、ただの指のトレーニングとは思っていません。曲の調性や和声進行、フレーズ等、きちんと構成を理解させてから、曲として取り組ませます。そうしないと、普通の曲を弾いた時に、指だけで弾く習慣がついてしまうからです。また、エチュード練習は数をこなせばよい、というでもないと思います。どのように質の高い練習ができるかが大切ですよ。だからチェルニーにしても、番号通りに一通りやってしまうのではなく、今必要だと思う曲を選んで、1曲1曲をきちんと取り組むようにしています。

——— ところで角野先生はお子さんが2人いらっしゃいますね。お二人とも全国大会で上位入賞されていますが、普段はどのようなエチュード練習をしているのでしょうか。

上の子(隼斗君)は、今ショパンのスケルツォ1番、ノクターン、バッハのイタリア協奏曲などを練習しています。チェルニーは40番を補足的に使っています。

下の子(未来さん)は、初見のためにバーナム、バイエルを1日1曲弾いています。毎日家で兄の音を聴いて、「その音を出したい」と触発されて、何とか兄の音に近づけようと何回も練習していました。身近な人の音というのが、彼女

にとっては重要なようです。一生懸命耳を澄まして、指先に神経を行き届かせて。私は時々、「後ろを向いて、今どっちが弾いているか当てるね」という試みをします。私は大体どちらが弾いているのか分かるのですが、ある時妹の方が弾いた時、「今のはどっちが弾いたか分からなかったわよ」と言ったら、とても満足そうな顔をしていました。

——— 身近に理想にできる音がある、というのはとても恵まれた環境ですね。それぞれのご家庭の音楽的な環境というのは、耳を鍛えるには欠かせない要素ですね。

楽器というのは、頭から指への指令によって弾くものです。頭の中にどのような音へのイメージがあるか、によって音は変わります。ですから、クラシックの優れた演奏を演奏会やCDで聴くというのは大切です。またそれだけではなく、ジャズやポップス等、今世の中にある様々な音楽を聴くことによって、自分の中に多くの引き出しを作ることができます。例えばリズム感を養うには、ジャズのノリが役立つと思います。

また、生活の中で見聞きしたものを、どのように音楽にリンクさせるか。例えば今日は雨が降っていますが、雨だれの音だって決して一定ではありませんし、強さも違います。生活の中で感性を磨くこと、そして音楽に結びつけるか。これがどれだけ重要なことか、ご両親にもお伝えしています。

東洋医学や漢方のように体質そのものを変え、これが大事ですね。



ウェブでご覧になれます。
<http://www.piano.or.jp>

チェルニー 30番 第9番 下田幸二先生×大友聖奈さん (小4)



腕を有効に使って、質の良い音を!

音量を出そうと思うけど出ないから、肩を上げてしまう。基本に戻って、とどまりながら一音一音出してみる。手首中心ではなく、腕を有効に使うこと。スタッカートの付いた右手の和音は、ていねいに弾いてから取る。

Allegretto vivace. (♩=80) チェルニー 30番より9番

チェルニー 30番 第28番 江崎光世先生×立木彩音さん (小4)



1. 指先と手首に注意

和音のスタッカートの連続。これは手首を落としたまま、アフタータッチを用いる。これは連弾でもよく用いる技法。

2. 左手にメロディあり

左手はチェロのように幅広く歌って。



3. 音楽の方向性と楽器の特性を知って

高音部を意識して出すように。楽器の特性上、低音部の方が音が出やすいが、音楽の方向性は高音部へ導かれるべき。それを意識した音を作ること。

Allegro. (♩=72) チェルニー 30番より28番

上級編：チェルニー 50番相当

チェルニー 50番 第7・8番 日比谷友妃子先生×川添文さん(中1)



1. 和声進行を意識してメロディを際立たせる

チェルニー 50番 第7番

【冒頭】力を入れると全部同じ音に聞こえてしまう。無駄な力を入れずに自然に音楽の持つニュアンスを自分の音で表現するように。和声進行を感じて、メロディの素敵さを最大限に聴いている人に伝えようとして。ショパンのエチュード Op.10-7 (Cdur) 冒頭の内声部に似たような動きがある。その軽さを意識して。4拍子が感じられる大きいフレーズにすること。速くする前に、音の潤いや香しさを出すように心がけて。

【17小節】調や音程が変わる部分。音質を変えてほしい。ショパンエチュード Op.10-7 中間部とも似たような動き。



2. p (ピアノ)、f (フォルテ)、スタッカートの質

p(ピアノ)といっても、その中にエネルギーがあるピアノを出してほしい。左手の小指でつなぐメロディを大切に弾くこと。スタッカートはモーツァルトやベートーヴェンからシューマンやブラームスにつながるドイツ系の響きを意識して。

3. 腕・体から深みのある音色と表情を

チェルニー 50番 第8番

ショパンの木枯らしと同じ短調。物語や風景を想像して。第7番と違うタッチで、腕、体から深みのある音色、表情が出せるように。

Molto allegro (♩ = 84)

チェルニー 50番 第7番

ミニインタビュー Vol.2

スケール・アルペジオ・分散和音を音楽的に

日比谷友妃子先生

チェルニー等のエチュードをやらせる時は、均等に指を動かすだけではなく、一つ一つの音の意味、ニュアンス、調性まで理解させるようにします。幸いチェルニーはシンプルにできているので構成が分かりやすいという利点があります。特にチェルニー 50番くらいになると構成がしっかりしているものもあり、基本的な良い勉強ができます。

チェルニーからショパンのエチュードにつなげるのは、タッチが違うのでやや難しい点もありますが、いずれも西洋音楽であることに変わりはないので、曲の構成を段階的に学ばせるには適しているでしょう。チェルニーで基礎的な音楽作りを理解しながら技術をつけ、モジュコフスキーを経てショパンのエチュードへ進めるというのが、妥当なパターンでしょうか。

【コラム】スケール・アルペジオは、こう弾かせています

音階を進度によりユニゾン、6度、10度で弾かせます。アルペジオも和音を変化させます。長音階、和声的短音階、旋律的短音階の違いを感じながら、調性の特徴も合わせて考え、つぶのニュアンス、バランスをよく聴くようアドヴァイスします。

カデンツは和声の基礎ですので、和音の特徴をとらえながら、より良い和音の響かせ方を勉強させます。





ウェブでご覧になれます。
<http://www.piano.or.jp>

モシュコフスキー 15の練習曲 第1番 杉本安子先生 × 清水沙亜耶さん (中2)



1. 構成を理解して、音色を変える

【17小節～・25小節～】旋律的短音階 (fis moll) を感じて、音色を変えること。2回同じ音形の繰り返しなので、2回目は少し柔らかい音色を作る。【45～48小節目】半音階で転調している。(A-As-H) それを意識して音色を変えるように。



2. 指だけでなく、腕が表現力に

チェルニーで指が動くようになってきているが、このレベルになると腕が表現力になる。腕を有効に使うように。



3. 三度の和音進行を、まとまりある音楽へ

【49小節～】まとまりあるフレーズに聴かせるにはどうすればよいか? 腕のみで弾いては乱暴になる。前腕を上げるのみでなく、指先を敏感にタッチしたら、指を元に戻してあげる。やわらかいバターに触っているような感触を想像して。アフタータッチを意識する。首の後ろが固くなるので、ほぐしてあげるとよい。



4. 力を入れる前の、一瞬の「脱力」

【96小節～】足を少し広げて、おなかにしっかり力を入れ、前のめりになるくらいに体重を乗せる。エネルギーみなぎる音に。腕の力を抜きつつ、うまく指に力を伝える。腕立て伏せをして、実感してみる。また4と5の指を鍛えること。

5. ショパン・エチュードを前にして

調性判定、和声分析して自分で楽曲構成を理解し、特別な指示が書いてなくても、自分で音楽の流れやエネルギーが感じられるように。またフォルテひとつとっても、指だけで弾くのか、手首や腕の重さをかけるか、あるいは体の重みをつけるのか、様々な音色を出せるようになってほしい。

モシュコフスキー 15の練習曲 第1番

最上級編：ショパン エチュード

ショパン エチュード Op.10-2,12 日比谷友妃子先生 × 鈴木隆太郎さん (中3)



1. メロディラインを極力美しく、音質に注意して

ショパン Op.10-2

【冒頭】右手の3・4・5のみで弾いてみる。明るさ、暗さ等のニュアンスが出せるように。深くし打鍵しすぎず、指がつま先だつようにして弾いて、音質が揃うように。次に内声の和音を左手でつけて弾いてみる。その後右手だけで両声部を弾く。あたかも別々の手で弾いているかのように、右手だけで一人二役をしなければいけない。

バスと和音で作られる音楽的な流れの上で、つぶに微妙な表情を感じながら、ゆっくりからよく聴いていねいにさらう。



2. 曲に込められた感情を表現

ショパン Op.10-12 「革命」

【冒頭】革命を意識させるような、激しく訴えかける和音。和音をつかむ時、右手4・5は特に意識して。血が騒ぐように。Op.10-2と違って、体・腕を使って力強いタッチで。



ミニインタビュー Vol.3

リズム変奏はさせず、「ゆっくり弾く」

日比谷友妃子先生

—— 鈴木隆太郎君はショパンのエチュードを弾いていますね。チェルニー等はどのくらいやってらっしゃるのでしょうか。

鈴木君はチェルニーをあまりやっていません。40番を中学に入って終えてから、技術的なチェックは音階、ハノンでやり、あとはショパン、リスト、ドビュッシーの練習曲などで実践的に勉強しています。家ではゆっくり弾いて「自分の音を聴く」ことを意識させます。私の教室ではどの子にもリズム変奏はやらせません。これをやると音楽が崩れてしまいますので。あくまでも音楽の中でいかに指をコントロールできるようにするかということを、技術の習得の目的としています。

そうはいつでも、どうしても家で練習する時は、パーっとつい速く弾いてしまうようです。私のレッス

ン室で弾くと、緊張して自覚するせいか、自分の音が如実によく分かるようです。ですからレッスンの時にゆっくり弾かせるようにしています。

—— 横で弾いて下さる先生のデモンストレーションが素晴らしいのですが、やはりすぐ隣で聞く音というのは具体的で説得力がありますね。

鈴木君は幼稚園の頃から指導していますが、この10年間で「自分で考える」という習慣は多少身についてきたと思います。欲を言うならば、もっと自発的に自分なりの音を追求してほしいですね。先生の音は一つの参考に過ぎません。「ここはこういう音ではないでしょうか?」と自分から言えるくらいになって、より説得力のある響きで演奏できるようになってほしいと思います



ウェブでご覧になれます。
<http://www.piano.or.jp>

ミニインタビュー Vol.4

基礎の積み重ねが、美しいショパン・エチュードへ

下田幸二先生

ショパンエチュードを3通りに分類して生徒に与えています。まず、一つは、すぐにでもステージにのせたいという曲。もう一つは半年から一年単位で勉強してステージにのせるもの。最後に、半年後、一年後ではステージにのせるのは難しいが、自身の欠点を少しずつ是正して、いつかはステージにのせることを目指す曲。やはりショパンエチュードは最高のテクニックの勉強になります。技術的な部分、つまりイン・テンポで弾ける、音量を強く保ったまま弾ける等だけでも、一般的な意味での技術の鍛錬という点でものすごく大変なことですし、しかも音楽が素晴らしいのですから。

イン・テンポで弾くこと自体が大変な場合が多いのですが、テンポで弾けたからといって美しくは聞こえません。逆にゆっくりだけ美しく弾けるという場合もありますが、両方できなければならぬわけです。テンポ、音量、美しく3拍子そろってはじめて作品となるわけです。

ショパンエチュードに入るタイミングですが、ツェルニーの30、40番から順番に綿密にやってきたという積み重ねが絶対必要だと思います。ツェルニー40番の最初の方がちょっと無理があるくらいの子が、コンクールにショパンのエチュードがあるからといって、取

り上げても決してうまくはいかないと思います。100歩譲ったとして1曲うまくいっても2曲目はダメになります。ツェルニー50番を多くこなしていても、ショパン・エチュードはやらせないことさえあるのです。要は基礎。ツェルニーやクレメンティ等を何曲やろうと基礎ができていなければ同じこと。脱力、手の形や腕の入れ方などの基本をマスターしているかを判断して、ショパン・エチュードを与えます。逆に、基本さえしっかりしているなら、50番の最初から並行して少しずつショパン・エチュードを弾かせることもあります。



野上真梨子さん(中1)は現在ショパンエチュード Op.10-4,5, Op.25-1,6 やスケルツォ第3番などを練習中

まず作品のキャラクターを表現する姿勢を

クラウディオ・ソアレス先生

まず作品のイメージを明確に持つことが大事です。肉体的な労働が大変になればなるほど、音楽から離れてしまいますので、まず作品のキャラクターを表現しようとする姿勢をしっかりと持たなければなりません。指や体ができていない状態で必死に弾いても、体に力が入って無理しているのが見えてしまいますし、ノーマスで弾いても表現する姿勢がなければ惨めな結果になります。

日本のピアノ教育は、総じて低学年は素晴らしいとします。しかし仮に小学生時代はうまくいっても、その先プロのレベルまで引き上げるのはとても難しいですね。難しい曲を弾かせたり、鍵盤を速く正確に叩いてい

れば技術がついてくる、という考えでは、音に対して鈍感になってしまいます。せっかく子供には「表現したい」という心があるのに、途中で無理させてしまう為に、破綻をきたすのは勿体ないことです。基本に忠実に、階段を少しずつ登っていけばいいのですね。



河合唯さん(中3)現在ショパンエチュード Op.10-4,5,8,12を練習中

【今回誌上公開レッスンにご協力頂いた生徒の皆さん】

下田幸二先生：大友聖奈さん(小4・2004B級本選優良賞/下田先生・小田島七重先生に師事)、野上真梨子さん(中1・2003E級本選優良賞)/江崎光世先生：長田悠希さん(小2・2004A1級本選優良賞)/緒方南友美さん(小5・2004C級本選進出)/立木彩音さん(小4・2004C級銅賞)/クラウディオ・ソアレス先生：上野真里亜さん(小4・2003C級決勝進出)、河合唯さん(中3・2004Jr.G級ベスト8賞)/角野美智子先生：小金井まりさん(小3・2004B級決勝進出)/日比谷友妃子先生：川添文さん(中1・E級本選優良賞)、鈴木隆太郎さん(中3・2003Jr.G級優良賞)/杉本安子先生：清水沙亜耶さん(中2・2004年D級本選優良賞)